

けんそうてんわう
顯宗天皇、

はじ をけのみこ しょう
初め弘計王と稱せり。

くめのわかご
一名は來目稚子。

りちうてい まご
履中帝の孫、

いちのべのおしほのみこ だい
市邊押磐皇子の第二子なり。

はえひめ い
母を黃媛と曰ふ。

はじ ゆうりやくてい
初め雄略帝の、

おしはのみこ ころ
押磐皇子を殺されしとき、

みこ とねり
皇子の帳内、

くさかべのおみ
日下部使主。

そ こ あ だ ひ こ
其の子吾田彦と、

てんわうおよ ぼけいおけのみこ ほう
天皇及び母兄億計王を奉じて、

なん たには よさのこほり さ
難を丹波の余社郡に避けたり。

おみ か た と く い
使主、名を變へて田疾來と曰ひ。

なほころ おそ
猶殺されんことを恐れ、

のが はりま しごみのやま
逃れて播磨の縮見山の

いはや い みづか くび
石室に入りて自ら縊れぬ。

てんわう
天皇、

これし
之を知らず、

おけのみこすゝ
億計王に勧めて、

はりまあかしのごほりむか
播磨赤石郡に向ひ、

しゝみのみやけのおびとおしぬみべのみやつこほそめ
縮見屯倉首忍海部造細目が

いへしもべ
家の僮となり、

ともたにはのわらはしょう
俱に丹波小子と稱せり。

あたひこ
吾田彦、

ずゐじょうさ
随従して去らず。

かたしんれいと
固く臣の禮を執る。

せいねいてい
清寧帝の二年十一月、

はりまのこくしいよのくめべのをたて
播磨國司伊與來目部小楯、

にひなめくもつ
新嘗の供物を

をさ
徴めんとして、

あかしのこほりいた
赤石郡に至り

ほそめいへえん
細目が家に宴す。

天皇、億計王に謂て曰く、

亂を斯に避けてより、

年數紀を踰えたり。

名を顕はし貴きを著はすは、

方に今夕にありと。

億計王、惻然として曰く、

自賛して害せられんは、

隱忍して身を全うするに孰興ぞやと。

天皇曰く、

吾は是去來穗別天皇の孫にして、

□

久しく厮役に苦しめり。

寧ろ大名を顯揚して死なんかと。

兄弟相持して泣く。

億計王曰く、此の事、

弟に非ずんば

則ち濟すこと能はざるなりと。

天皇、辭讓すること再三。

億計王、固く之を強ふ。

天皇、之に従ふ。

細目、二王に命じて燭を乗らしむ。

夜深く酒酣にして、

家人をして起ちて舞はしむ。

舞畢りて、細目、

小楯に謂て曰く、

僕、此の燭を乗る者を見るに、

人を先にして己を後にし、

恭敬退讓にして、

君子と謂ふ可しと。

是に於て、小楯、絃を撫で、

二王をして起ちて舞はしむ。

兄弟、相讓ること之を久しくす。

小楯、責めて曰く、

何ぞ速に舞はざると。

億計王、先づ起ちて舞ふ。

すで 既にてんわうして、天皇、起たちて衣帶いたいを整ととのへ、
うた いは

歌かはひて曰いく、稻いなむしろ、
やなぎ みづ

川そそひ柳ね、水うゆけば、靡なびき起おきたち、

其の根は失うせずと。
つひ たつゝまひ な

逐となに殊舞いはを作し、唱となへて曰いはく、
やまと ちはら あさちはら

倭はそゝの茅原、淺茅原、
おとひ

弟日きやつこらなりと。
をたて き これ あや

小楯、聞ききて之これを怪あやしみ、更さらに復また唱となへしむ。
てんわう とな いは いそ かみ

天皇、唱いへて曰いはく、石いその上かみふるの神杉かみすぎ、
もと すゑ

本いきり末すゑおしはらひ、市邊宮いちのべのみやに天あめの下治したしろしめしゝ、
あめ

天くよろづ國くによろづ
おしはのみこと みすゑ

押磐尊の御裔みすゑやつこらなりと。
をたて おほい おど

小楯、大に驚おどき、
せき はな さいはい

席きを離はなれて再さい拜はいし、其その属ぞくを率ひきゐて、
こと う きようきふ

事ことを承うけて供給きようきふし、悉ことごとく郡民ぐんみんを發はつし、
あらた みや つく これ を

新に宮かへを造そりて之そに處じやうらしめ、
還そうりて其の状そを奏そうす。

帝、大に喜びて曰く、

天、博愛を垂れ、

賜ふに二兒を以てすと。

廼ち大臣・大連と策を定め、

迎へ取りて宮中に入れ、

億計王を立て、皇太子となし、

天皇を皇子となす。

五年正月、

清寧帝崩ず。

皇太子、位を天皇に譲る。

天皇、固辭して従はず。

是に於いて、

飯豊青皇女、

自ら忍海飯豊青尊と稱し、

政を忍海角刺宮に聽く。

十一月九日戊寅、

清寧天皇を葬る。

是この月、飯いひとよのあをのみことこう豊青尊ひやくくわん薨おほいず。

十二月、百官ひやくくわん、大おほいに廷ていに會くわいす。

皇太子くわうたいし、

璽じを執とり、之これを天皇てんわうの前まへに置おき、

再さい拜はいして退しりぞき、

諸臣しよしんの位くらゐに就つきて曰いはく、

夫そ帝位でいていは、

功こうある者もの以もつて之これに居をるべし。

今日こんにちあることを致いたせるは、

皆弟みなていの功こうなりと。

天皇てんわう、固辭こじして曰いわく、

白髮しらがのすめらみこと天皇くらゐ、位つたを兄つたに傳はつへんと欲ほつし、

立たて、皇太子くわうたいしとなせり。

且かつ兄けいの爲ために事ことを謀はかりて、

其そのの功こうに處をり、

弟恭ていきようの義ぎを失うしなはんことは、

弘計をけの爲なすすに忍しのびざる所ところなりと。

くわうたいし いは
皇太子曰く、

しらがのすめらみこと

白髪天皇の、

てんか われ ぞく

天下を我に屬せられし所以は、

たゞわ ちやう を

徒我が長に居るの故を以てのみ。

おも

惟ふに、

てい かなん だつ

弟は家難を脱し、

ていそん しゃうけん

帝孫を彰顯せんことを

はか

謀りたれば、

しんしん

搢紳、

よろこ いたゞ

忻び戴き、

けんしゆ こころ

黔首、心を歸せり。

もつ よ しゐ かた

以て克く四維を固め、

なが まん えふ さかん

永く萬葉を隆にするに足らん。

われ これけい いへど

我は、是兄たりと雖も、

じつ こうとく

實に功德なし。

よりむころあら

據に非ずして據らば、

きうくわいかなら いた

咎悔必ず至らん。

われき
吾聞く、

てんる
天位は、

もつ ひさ むな
以て久しく曠しくすべからず、

てんめい
天命は、

もつ けんきよ
以て謙拒すべからずと。

たぐてい しゃしよく もつ
唯弟、社稷を以て、

はかりごと な
計を爲し、

ひやくせい こゝ な
百姓を心と爲せと。

そ げんかうがい
其の言慷慨にして、

りうてい いた
流涕するに至る。

てんわう
天皇、

や え これ ゆる
已むことを得ずして之を許し、

いま にはか くらゐ っ
未だ遽に位に即かず。